

[論 文]

I T ボランティアによる地域商店街の情報化

Computerization of Local Shopping Areas by IT Volunteers

凍 田 和 美

Korida Kazuyoshi

近年、情報通信技術 (ICT) が飛躍的に進歩し、社会や経済全般に大きな変化をもたらしている。大分市では、民間事業者等により早くからインターネットサービスが提供され、情報化に向けた基盤整備が進められた。しかし、大分市内の家庭または職場におけるインターネット利用率は、全国の平均以下であり、世代間での隔たりも大きい。大分市は情報通信技術が地域活性化や行政の市民サービス向上など、地域課題を解決するための有効な手段になるとして、その実現を図るため平成16年に大分市地域情報化計画を策定した。これによると、地域の活動主体である市民や市民団体・企業・行政が I T を利活用することにより市民生活の向上を実現することが課題となっている。

本研究では、大分市地域情報化計画の一部である「インターネットを活用した市民活動支援」に、I T ボランティアである本学学生と共に参加し、市内商店街のホームページを作成することで、大分市の地域情報化について考察する。

はじめに

総務省の通信利用動向調査 (平成18年) によると、日本のインターネット人口は平成17年の調査時点で8,529万人、人口普及率は66.8%となっている (図1参照)。また、年代別のインターネット利用率をみると6~12歳は65.9%、13~49歳は90%以上、50~59歳は75.3%、60歳~64歳は55.2%がインターネットを利用しており、幅広い世代にインターネットが普及していることが分かる。特に、60歳以上は平成16年と比べて増加率が著しく高くなっている (図2参照)。

政府 (高度情報通信ネットワーク社会推進戦略本部) は、平成17年度までに世界最先端の I T 国家となることを目指して、平成13年1月に「e-Japan 戦略」を策定した。さらに、I T の利活用による「元気・安心・感動・便利」社会を目指すため、平成15年7月に「e-Japan 戦略II」を策定している。地域自治体では、福岡市が「福岡市情報化プラン」、大分市が「大分市地域情報化計画」^[1]を策定するなど、多くの市町村が I T を利活用するために情報化の計画を進めている。大分市中心部では、民間事業者等により早くからインターネットサービスが提供され、情報化に向けた基盤整備が進められた。今後は、I T を利活用することにより、市民一人一人や市民団体・企業・行政などの地域の活動主体が、市民の生活を豊かにすることが求められる。平成17、18年度に、大分市地域情報化計画の一部である「インターネットを活用した市民活動支援」に、本学学生らが I T ボランティアとして参加

し、市内商店街の住民と共同で、商店街のホームページを作成した。

本研究では、ITボランティアである本学学生と共に、大分市地域情報化計画に参画するなかで、地域情報化の課題となる要因や商店会の情報化の課題を明らかにする。また、住民が更新しやすいホームページについても考察する。

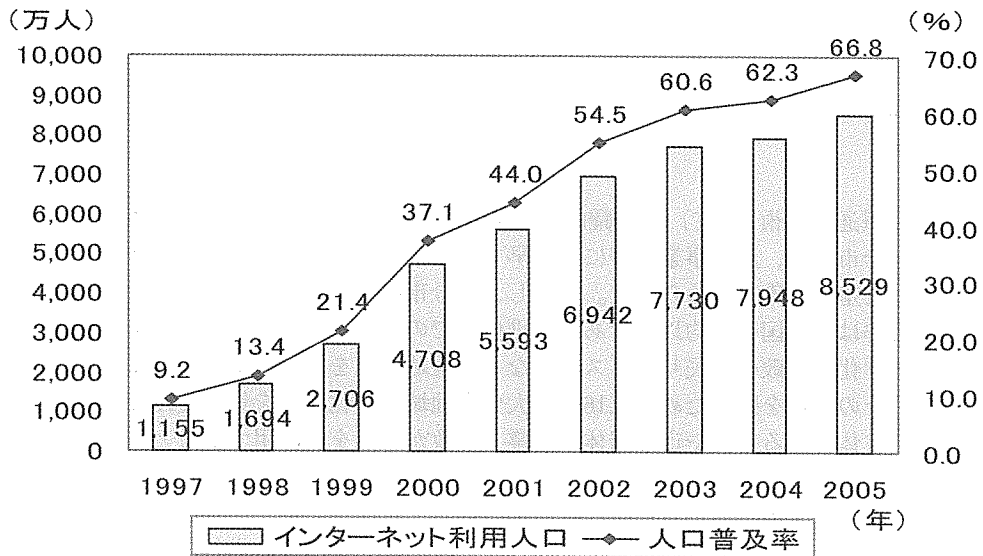


図1 インターネット利用者数・人口普及率^[2]
(総務省18年度版情報通信白書より)

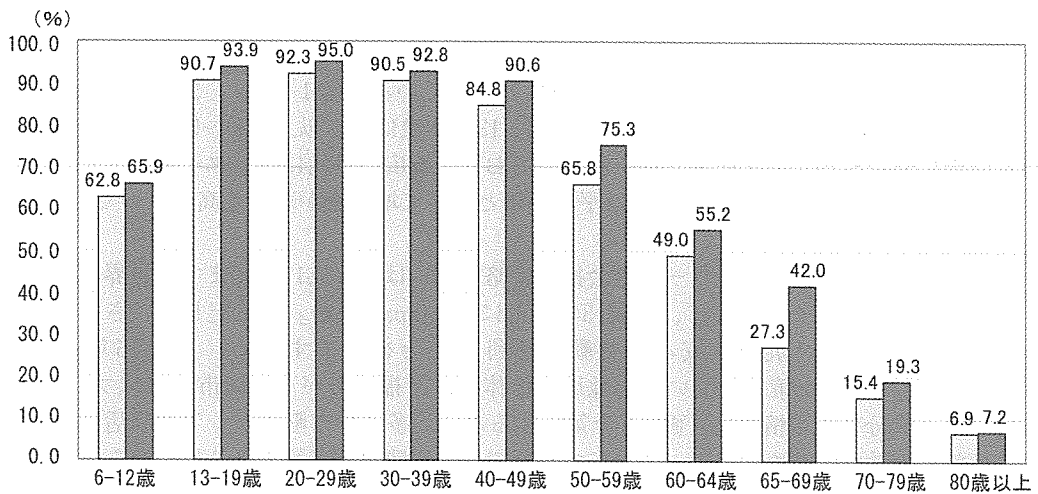


図2 年代別にみたインターネット利用率^[3]

大分市の地域情報化

(1) 大分市地域情報化計画の概要^[1]

大分市地域情報化計画の趣旨は、市民や企業への情報のサービス内容や提供方法、市役所内部の情報化などについて方針と施策を明らかにし、情報化を実現することである。大分市地域情報化計画策定のために、①大分市民や大分市内企業の情報化の現状や要望を把握するためのアンケート調査、②大分市民や大分市内企業と協力・連携を深め、市民の声や民間企業のノウハウを取り入れながら進めていくための懇話会の開催（「大分市地域情報化懇話会」を設置、平成15年4・8・11月の合計3回）、の2つを実施し多くの意見を大分市地域情報化計画に反映した。筆者は、懇話会の副会長、大分市地域情報化推進委員会の副委員長を務める。

計画実施期間は平成16年度～平成20年度、基本理念は<「つながる」「ひろがる」「創り出す」情報躍動都市O I T A>である。この理念に基づき施策の柱として「市民の情報化」「産業の情報化」「行政の情報化」「パートナーシップの創出」の4つの方向性を掲げている。

(2) 情報化施策の4つの展開

大分市地域情報化計画は施策の4つの柱を基に、具体的な取り組みを策定している。「市民の情報化」は快適で豊かな市民生活の実現、「産業の情報化」は活力ある地域経済・産業の創造、「行政の情報化」は市民のための行政サービスの充実、「市民との協働」は市民とのパートナーシップの創出を目指している。

① 快適で豊かな市民生活の実現

施策の柱は、市民の情報リテラシーの向上を図る「ひとづくり」、市民生活の安全、利便、快適を支援する「まちづくり」である。

② 活力ある地域経済・産業の創造

施策の柱は、「I Tの活用による既存産業の活性化」「企業家支援」である。

③ 市民のための行政サービスの充実（電子自治体の構築）

施策の柱は、「行政サービスの向上」「業務の効率化」「庁内インフラの拡充」である。

④ 市民とのパートナーシップの創出

施策に、市民の市政参画、市民との協働、市民をささえる団体・人材育成支援などがあげられる。

(3) 大分市情報化の状況^[1]

大分市地域情報化計画策定当時の状況は以下の通りである。

① 国の計画による整備

大分市は、昭和59年にテクノポリス構想（旧通産省）の母都市と位置づけられて以来、ニューメディア・コミュニティ構想（旧通産省）、テレトピア構想（旧郵政省）、インテリジェント・シティー構想（旧建設省）、ハイビジョン・シティー構想（旧郵政省）等の指定を受け、高度情報通信技術の整備や各種システムの整備を進め、地域情報化の推進に取り組んでいる。

② 地域情報化に関わるシステムの稼動状況

テレトピア計画の推進等による在宅老人コミュニケーションシステム、市民図書館貸

し出しシステム、大気汚染常時監視テレメーターシステム、公共施設案内・予約システム、大分市ホームページ、例規集検索システム、物品見積システム、議事録検索システムなどを構築し、市民サービスの向上を図っている。

③ IT講習

平成13年度に、e-Japan 戦略に基づいて、全ての国民の情報リテラシー向上のために学習機会を与えるIT基礎技能講習会事業が全国で実施され、大分市でも多くの市民が受講した。講習はパソコンの基本操作やメール、インターネットの利用方法などを中心に行われ、その後も子供や親子、高齢者等を対象にした講習が公民館や情報学習センター等で行われている。

(4) くらしと情報化に関する市民意識調査^[1]

大分市は、平成15年2月5日～26日、無作為抽出した大分市民3,000人を対象に、情報化に関する市民意識調査を実施した。主な調査結果を以下に示す。

- ① 各情報機器のうち、最も利用率が高いのは「携帯電話・PHS」(58.6%)であり、次いで「パソコン」(43.7%)となっている。年齢別では、50歳未満での「携帯電話・PHS」及び「パソコン」の利用率が高く、50歳以上の層では全体的に利用率が下がり、70歳以上では、「いずれも利用していない」が61.4%となる。
- ② 全体の37.3%がインターネットを利用している。40歳代までは約65%がインターネットを利用しているが、その後、年齢とともに利用している割合は減少し、70歳以上でインターネットを利用しているのは、わずか8.4%である。
- ③ 自宅の接続回線は、CATVが30.1%と最も高く、次いで加入電話回線(24.7%)となっている。
- ④ インターネットを利用する際の端末ではパソコンが86.6%と最も高く、次いで携帯電話(28.2%)となっている。年齢別でみると、20代では携帯電話の割合が50.7%と高い割合になっているが、40歳代以降は20%以下で、その後年齢とともに減少する。
- ⑤ 自宅でよく利用するインターネットサービスでは、「さまざまな情報の検索」が85.9%と高い値となっており、次いで「友人・家族との電子メール交換」(65.9%)となっている。
- ⑥ インターネットを利用していない理由として最も割合が高いのは、「接続する機器を持っていない」(54.2%)であり、次いで、「設定や操作が難しい」(33.7%)、「通信料等の負担額が高い」(28.7%)となっている。
- ⑦ インターネットを利用していない人の35.8%が今後利用したいと考えている。年齢別では年齢が若いほどインターネットを利用したいという意向が強く、20歳代では64.1%が利用したいと考えている。
- ⑧ 現在インターネットを利用していない人の今後利用したいインターネットサービスをみると、「様々な情報の検索」(79.8%)、「友人・家族との電子メールの交換」(68.8%)、「ホテルや各種チケットの予約や申込」(44.7%)が高い割合となっている。

インターネットを活用した市民活動の支援

(1) ITボランティア

市内大学の学生や市民からなるITボランティアがホームページを作成することで、市民がインターネットを積極的に利用し活発に活動を展開する。また、ホームページの作成を支援することで市民ポータルサイトの充実を図り、地域情報の発信とネットワーク化を推進する。また、住民の相互理解や産業の振興等、様々な市民活動を支援する。

ITボランティアの役割は、①商店街のホームページ作成支援を行い、②商店街がホームページを自己管理できるように指導することである。大分市内の大学生や市民がITボランティアとして、各団体の要望を聞き、それをホームページの企画や作成に反映させる。そして、インターネットにより全国に情報を発信し、団体の活性化を図る。

平成17年度は、日本文理大学の学生3名が佐賀関ツーリズム研究会、戸次本町街づくり推進協議会のホームページを、本学学生4名が西大分商店街と東大分商工振興会のホームページを作成した。平成18年度は、本学学生3名が、富士見が丘商店会のホームページを、日本文理大学の3名が、NPO法人岡原花咲かそう会のホームページを、大分大学の学生3名が大分県腎臓病協議会のホームページをそれぞれ作成支援する。本稿では、本学学生が支援を行った西大分商店街、東大分商工振興会、富士見が丘商店会に対する活動について述べる。

(2) 現地調査

平成17年度は、西大分商店街と東大分商工振興会の現地で取材を行った。西大分商店街は、実際に柞原八幡宮に行き、神社の様子を写真やビデオで撮影をした。浜の市（仲秋祭）にも参加し、祭りの様子を撮影した。また、現地の人に話を聞いたり、西大分駅周辺の景観を撮影したりした。東大分商工振興会では、萩原の夏祭りと朝市に参加し、それぞれの様子を撮影した（図3）。また、現地の人に話を聞くためにお店を一軒ずつ取材した。平成18年度は、富士見が丘商店会に行き、各店舗の人にITボランティアの活動を伝えた。富士見が丘商店会の方は、直接の取材などが苦手な人が多いため、

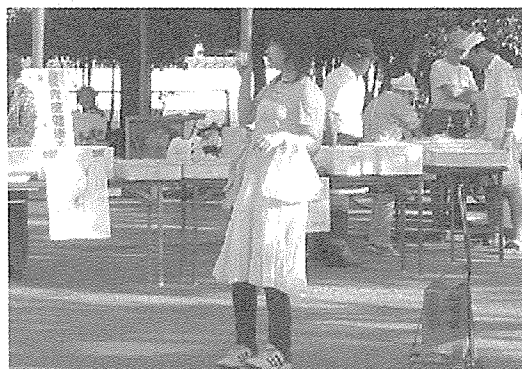


図3 現地調査の様子

表1 現地調査

	西大分商店街	東大分商工振興会	富士見が丘商店会
調査日数	5日	8日	5日
内容	柞原八幡宮仮宮、かんたんサーカス、浜の市、神楽、出店、志きし餅、花火、試作ページ意見収集、道着の写真、駅周辺の景観の写真。	打ち合わせ、神社の写真、夏祭り取材、催し物、お店の取材、資料依頼、朝市取材、お店の取材、試作ページ意見収集。	朝市取材、店舗へあいさつ、店舗資料回収、各店舗の写真撮影、試作ページ閲覧、代表者の音声を録音。

それぞれの店舗に手紙を送り、調査紙面を回収するとともにお店の人や店舗の外観を写真撮影した（表1参照）。

①西大分商店街

西大分駅周辺に14店舗が存在している。上八幡には豊後一の宮である柞原八幡宮がある。宝物殿には国指定重要文化財や県指定重要文化財が所蔵されている。西大分駅近くにある柞原八幡宮仮宮では、志きし餅で有名な浜の市（仲秋祭）が毎年9月に行われる。浜の市の日は、民謡・神楽や花火などが催され、地元だけでなく多くの人々で賑わう。

②東大分商工振興会

大分市萩原地区周辺に点在した29店舗から成っている（平成18年1月24日現在）。飲食店・文具店・電気屋・印刷屋など幅広い分野のお店が振興会に参加している。元々は、まとまった商店街であったが道路拡張工事のための立ち退き後、店が散らばり現在の商工振興会が形成された。商工振興会の主催する行事に「夏祭り」と毎月第4日曜日に開催する「朝市」がある。12月の朝市の餅つきには多くの人々が訪れる。

③富士見が丘商店会

大分市富士見が丘団地の中にある。富士見が丘団地は広く、多くの市民が住んでいる。その中で富士見が丘商店会は、市民にとってなくてはならない存在である。商店会には、気さくな人が多く、温かい雰囲気を持った商店会である。富士見が丘商店会では、様々な行事を企画しており、住民の多くがそれに参加している。

(3) ホームページ作成

ホームページ作成には、ホームページ・ビルダーを使用した。掲載している写真は取材で撮影したものと商店街から借りた写真を使った。富士見が丘商店会では、商店会の人々のメッセージを音声で聞けるようにした。各ホームページの情報量と作成日数を表2に示す。

<西大分商店街>

ホームページには、柞原八幡宮、浜の市、志きし餅、お店紹介、写真、地図のメニューがある。トップページは、商店街の様子、浜の市の様子、柞原八幡宮の写真を使い、レトロをイメージして、フラッシュによる動画を作成した（図4）。

①「柞原八幡宮」と「浜の市」と「志きし餅」のページ

『郷土の歴史―生石風聞録』甲斐光：著の本を参考にそれぞれの歴史や由来を掲載した。

②「植木商事」のページ

店主の希望を聞き、FAXで注文出来るようにした。更新しやすいように注文書は画像にした。

③「地図」のページ

地図は、詳しいお店の位置が分かるように、Microsoft Wordの図形描画の機能とMic-

表2 ホームページの情報量と作成日数の比較

	西大分商店街	東大分商工振興会	富士見が丘商店会
総ページ数	11ページ	25ページ	31ページ
写真の数	31枚	43枚	54枚
作成日数	3ヶ月程度	3ヶ月程度	3ヶ月程度

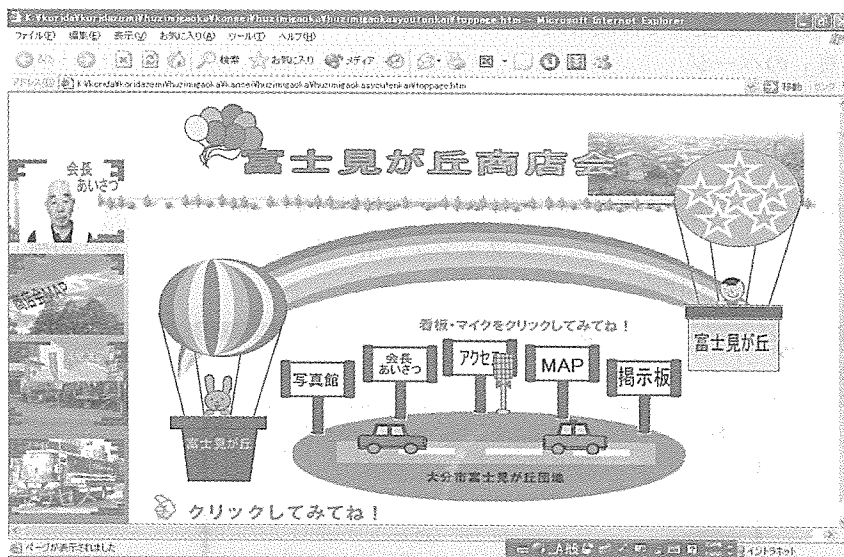


図6 富士見が丘商店街のトップページ

①「お店紹介」のページ

東大分商工振興会は29店舗あるので、お店を「グルメ」「ライフ」「ショップ」「カルチャー・ホビー」の4つの分類に分け載せることにした。

②「朝市」「夏祭り」のページ

朝市と夏祭りは商工振興会が主催の大きな行事なので、掲載文や写真の選考に時間を要した。

③「地図」のページ

東大分商工振興会は店舗が萩原地区周辺に点在して、場所がわかりにくいいため、詳しい地図が必要だった。小さな道が多く、複雑だったため地図作成ソフトで作成することができなかった Microsoft Word と Microsoft ペイントを利用した。

<富士見が丘商店会>

各店舗の情報と、富士見が丘団地で行っている行事の情報を収集し、ホームページを作成した。トップページは、楽しい・賑やかなイメージになるように、気球・虹・風船・車・道路・マイクなどはウェブアートを利用した。気球は、両サイドに配置し飛んでいるように動きをつけた。背景は、イラストやボタンが見栄え良くするために白に設定した(図6参照)。

①「商店会マップ」のページ

一つひとつのお店がわかりやすいようにイラストを取り込み、地図は、ペイントで描いた。お店の人のイラストをクリックすると、詳しい情報を見ることが出来る。

②「写真館」の《朝市》と《活動》のページ

写真館のページは、朝市と活動にリンクできるように作成した(図7参照)。朝市のページは、売られている商品がわかりやすいように配置した。活動のページは、富士見が丘団地で行われている行事を掲載した。

③「会長あいさつ」のページ

会長の写真を載せ、かつイラストを利用して親しみやすさを出すように心がけた。背景

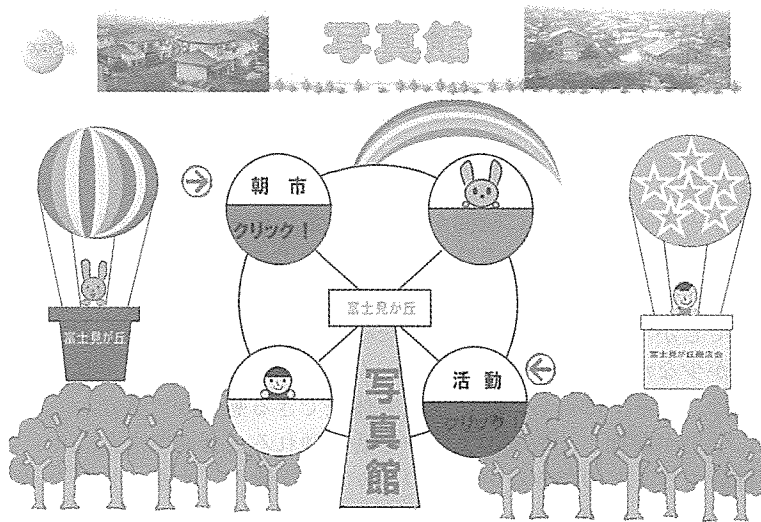


図7 「朝市」「夏祭り」のページ

を取り入れた。

④「アクセス」のページ

富士見が丘商店会の地図と、バスの時刻表を取り入れた。バスの時刻表は、大分交通バスのホームページへのリンクを付した。

考 察

(1)大分市の地域情報化

ITボランティアの活動を通して、学生も十分に地域情報化に参加できることが分かった。また、商店街（商工会）の人々がもつ以下の課題が明らかになった。

①情報化の効果を十分に理解していない

情報化を進めることによってどのような効果があるかを理解していない。

②パソコンなどの情報機材がない

ホームページを管理する際に必要なパソコンやプリンタの購入や設定から始める必要があった。

③情報機材を扱える人がいない

商店街の事務所のパソコンで、試作ホームページを閲覧したが、商店街の人はパソコンの利用にまったく不慣れな人が多かった。

情報を更新する場合も学生任せであり、商店街の人が地域情報化について消極的であった。アンケート回収時の白紙の回答や写真撮影を断る人もいて、商店会の中にやる気を感じない人もいた。地域情報化を進めるためには、商店街の人たちが地域情報化に関する知識を深め、その効果を理解することが必要である。大分市も地域情報化計画を市民に十分説明して、意識を高めるべきだと考える。

年度末に西大分商店街・東大分商工振興会の方に行った意識調査では、各商店街とも「商店街の情報をホームページで発信する良さ」について「多数の人に知ってもらえる」と答

えている。また、「パソコンやインターネットを使うための技術や知識は増えましたか？」という質問に西大分商店街は「増えた」東大分商工振興会は「どちらかといえば増えた」と答えている。地域情報化に触れたことで各商店街の技術や知識が増えたようである。

(2) ITボランティア

地域の取材とホームページ作成に時間がかかり、商店街の人たちが自分でホームページを管理できるように指導することは不十分であった。次のことが明らかになった。

①ホームページ作成の過程で教室では得られない意義を感じる勉強ができた

学生は授業でしかホームページを作成したことがなく、ホームページ作成のために必要な知識や経験が少なかった。そのため、ホームページ作成に予想以上に時間がかかったが、学生にとっては、教室では得られない意義を体験できる勉強ができた。

②地域社会に学生が参加し、地域の文化や生活に触れることができた。

授業では経験することのできない地域の方々との交流や、今まで知らなかった地域の行事やお店などを知ることができた。少人数で商店街のホームページを作成することは時間的に厳しい面があった。人数が多ければ、作成するページの分担ができ作業がはかどったかと思う。

③商店街の人々と予定を合わせるの難しい

学生の授業の日程と商店街の人の仕事の日程がなかなか合わず、実際に取材に行くまで時間がかかった。東大分商工振興会では、メールでやり取りをしたが、返信が届くまで日数がかかった。富士見が丘商店会では、情報収集として店舗にアンケートを送付し、返信用封筒で受け取る形をとった。しかし、数軒は白紙で回収することになった。

(3)ホームページ作成

ホームページ作成途中に、他の学生、商店街の方、市役所の方に試作したホームページを見てもらいその結果による改善を行った。以下に改善した点を示す。

<西大分商店街>

①商店街の写真の追加：西大分商店街周辺の写真を入れたらどうかという意見があったので、西大分駅周辺の景観の写真を撮影しページを作成した。文字ばかりで見にくかったページには、写真を増やすことで読みやすくなるように工夫した。

②難しい漢字のふりがな付け：難しい漢字にふりがながほしいという意見があったので、子供や誰にでも読めるように漢字にふりがなをつけた。

③写真の明るさの強化：全体的に写真が暗く、商店街のイメージが暗かったので写真を明るくした。

<東大分商工振興会>

①動画に使用する写真の追加：東大分商工振興会の動画は、使用している写真が少なかったのを数を増やした。

②お店の写真の追加：お店から要望のあったページしかお店の外観の写真を載せていなかったのを、商工振興会の方と全てのお店を回り、全てのページにお店の外観の写真を載せた。

③朝市と祭りのページのデザイン変更：朝市と夏祭りのページは写真が並んでいるだけだという意見があったので、デザインを変更し、写真と文章を交互に表示した。また、全て

のページを左揃えで作成していたので、中央揃えに変更した。

<富士見が丘商店会>

- ①トップページ：楽しい・賑やかなイメージで作りかえた。スクロールを不要にした。
- ②朝市ページ：デザインを変更し、商品を主に並べるようにした。そして、一つひとつの画像に、商品の名前を入力した。朝市の写真の大半が、無表情で写っている方の写真だったので、なるべく顔がはっきり写っていて、笑顔の写真を提供して頂いた。
- ③全体的に楽しさが出るように、BGMを取り込んだ。
- ④トップページで、ホームページの説明が出るように、商店会の方の声を聞けるようにした。

(4)ウェブアクセシビリティ

高齢者や障害者など心身の機能に制約のある人もウェブ情報に利用できるウェブアクセシビリティに気を使った。「大分県ホームページ作成ガイドライン」^[4]には、コンテンツを作成する際の技術的な基準が、①全体構成に関すること、②文字や色に関すること、③画像に関すること、④リンクに関すること、⑤その他、の5つに分類されて記されている。これを参考にして、商店街のホームページを作成した。画面サイズは、左右スクロールを必要としないように600～750ピクセルに固定した。文字のサイズは、利用者側が自由に変更出来るように固定しなかった。読み上げソフト使用の際に画像の意味が分かるように、写真や図にはalt属性で図の意味を説明するテキストをつけた。利用者のブラウザの種類に関係なく動作

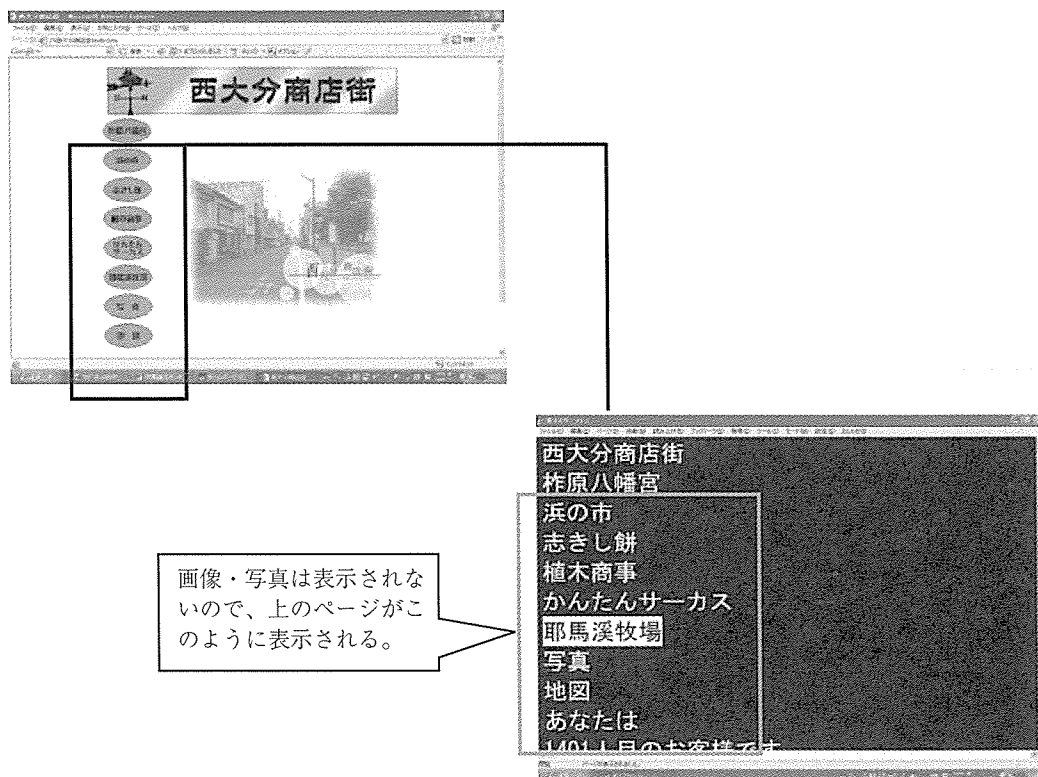


図8 読み上げソフト使用時

するように、「Netscape」と「Internet Explorer」で閲覧を確認した。また、読み上げソフトを使用し、視覚障害者が使いやすいような検討を行った（図8参照）。使用したソフトは「ボイスサーフィン（体験版）」^[5]である。読み上げソフトを使用した結果、①リンクが分かりにくい、②漢字の読み方が違う、の2つの問題が明らかになった。対応として、①リンクボタンにリンク先を alt 属性で「お店紹介」→「お店紹介へのリンク」に変更した、②単語ごとに空白を入れる、文章の分かりやすい位置で句読点をいれる、の2つにより改良した。しかし今後の課題として、実際に視覚障害者に閲覧していただきこれで十分かどうか確認する必要がある。

(5)ホームページの更新方法

商店街の人が各自でホームページの情報管理ができるように更新方法を検討した。

ページの編集には、①ホームページビルダーソフト、②Microsoft Word、③フリーソフトHTMLエディタの3方法が考えられる。西大分商店街と東大分商工振興会では、ソフトを新たに購入する必要がなく、初心者でも使用しやすいMicrosoft Wordで更新する方法をとった。富士見が丘商店会は、事務所のパソコンにホームページ・ビルダーが入っていたので、これを使用することにした。画像・写真の変更方法では、画像・写真の拡大・縮小や画像・写真に文字を入れることが必要なので、Microsoft ペイントを使用することにした。ホームページの更新作業は、フリーソフトのFFFTPソフトを使用することにした。

更新方法についての手順は、Microsoft Wordを使用してプリントを作成し、そのプリントの内容は、実際にホームページ・ビルダーの画面を使用して、画像を挿入する例を挙げ、誰でも更新できるように図を多用した。

ホームページの更新方法を各商店街の人に伝え、アンケートを実施した。「更新方法を理解したか」という質問に、西大分商店街の人は「理解できた」、東大分商工振興会の人は「どちらかといえば理解できた」と答えた。また、「ホームページの更新はできますか」という質問に、西大分商店街の人は「更新できる」、東大分商工振興会の人は「ほかの人の手助けでなんとか更新できると思う」と答えた。しかし、18年度になって、画像が欠落しているページやリンクができないページがあることが分かり、学生と共に前年度のホームページのアフターケアを行った。今後は、各商店街から更新などの質問に、常に対応できる体制作りが必要である。

結 論

大分市地域情報化計画も計画実施期間が2008年度まで残っている。インターネットの利用者は年々増加しているが、地域情報化に関わり、問題なく進められているのは、限られた人々であることを感じた。

地域の情報化は、その地域に住む全ての人に関心をもたなければ広がらない。本活動を進める過程で、地域の情報化を進めるには、①地域情報化計画を市民に十分に説明し、情報化の意義を地域住民が理解する、②情報機器利用に不慣れな世代にIT研修の場や講習会を開催する、③学生や市民がITボランティアとして参加する機会を増やし、市内商店街の住民と共同で、商店街のホームページを作成する、などの必要性が明らかになった。

一方、ITボランティアとして、商店街のホームページ作成支援を行うことで、学生は、

①住民の要望を集める難しさ、②要望を満たすホームページ作成の難しさ、③多くの人にとって、見やすいホームページ作成の困難さ、④高齢者や障害者など心身の機能に制約のある人に気を使ったホームページ作成の大切さ、⑤文字・静止画・動画・音声など、多様な情報の活用の大切さ、など、それまで、教室では得られない勉強ができた。

また、大分市の地域情報化計画に学生として参加することで、学生は、授業では経験することのできない地域の方々との交流や、今まで知らなかった地域の行事やお店などを知ることができた。最近では、デパートや地方の大型アウトレットストアで買い物をする事が多く、地域の人々や文化に触れることが少ない。お店の取材では、学生は、実際に商品を作る所、商品を作るための特別な機械などを見ることができ、商店街の良さを知った。また、参加したことのない行事に参加したことで、地域の行事の賑やかさを知り、昔から言い伝えられている話や代々受け継がれている山車に触れることができた。

今後の課題として、実際に視覚障害者に閲覧していただきウェブアクセシビリティが十分かどうか確認する必要がある。また、商店街の人たちが容易に行えるホームページの更新方法の開発、商店街の人から質問などがある場合に、きちんと対応できる体制作りを早急に行うことが必要である。

これからも多くの学生や市民が地域の情報化、文化、活動に参加できるように、事業が継続して行われることを期待する。大分市地域情報化計画は2008年まで続くが、それまでに多くの市民にこの計画が浸透し、積極的に情報化を生活の一部として活用できるようになることを期待する。

謝 辞

学生にホームページを作成する機会を与えてくれた市役所の情報政策課の方々、ホームページ作成にご協力して頂いた商店街の方々に感謝いたします。また、ITボランティアとして実際に大分市地域情報化に参加した、17年度卒業研究生の佐藤麻代さん、清家美香さん、18年度卒業研究生の河野愛さん、谷口理美さんに感謝します。

参考文献

- [1] 大分市：大分市地域情報化計画、情報化施策の展開、情報化を取り巻く状況
<http://www.city.oita.oita.jp/>
- [2] 社会実情データ図録：インターネット人口普及率推移と年齢別地域別利用率
<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/6210>
- [3] 総務省 <http://www.soumu.go.jp/>
- [4] 大分県ホームページ作成ガイドライン
<http://www.pref.oita.jpenu/guidelines/guidelines.html>
- [5] ボイスサーフィン
<http://www.amedia.co.jp/product/vs3/>